日本をキリストへ
協力
29

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会
〒101　東京都千代田区神田駿河台2-1
TEL 03-3296-1001

野宿で夜番を

伝道団体連絡協議会役員　姫井　雅夫

一九九四年を間も無く閉じようとしています。今年もいろいろな事があったことを例年のように思い起こしています。私たちの「伝道団体連絡協議会」に属する団体を通して、各方面で大きな運動が起こり、また地道な伝道の業が繰り広げられてきました。

主のなさる業に心からの感謝を捧げます。と同時に多くの犠牲を払いながら伝道に当たられた方々の労にも感謝を捧げたいと思います。主が豊かにお報いくださいますように。

それにしても、多くの伝道の試みがなされたにもかかわらず、今年もクリスチャンの人口を一％以上に伸ばすことは出来なかったように思います。日本の土壌を、マタイ十三章の記事に照らしながら、道ばたなのか、岩地なのか、それともいばらの中なのかと考えてしまいます。一生懸命、伝道の努力がなされているにもかかわらず、多くの実を結ぶことが出来ないとすれば、種を蒔くことよりも、土地を耕し肥料を施す、つまり良い地にしていくことが先決なのかと思ったりもします。

さて、年末にはクリスマスを迎えます。クリスマスに纏わる記事の中から、「野宿で夜番を」ということばが目にとまりました。

いつものことを、いつものように

羊飼いは羊を飼うといういつものことを、いつものようにしていたのです。昼間は牧草を食べさせ、夜は野宿をしながら羊の番をしていたのです。「すると」主の使いが来て、キリストの誕生を伝えました。主の栄光が周りを照らしました。

何か特別なことをしたから、この出来事が起こったのではありませんでした。

ジョン・ウエスレーは「もし明日死ぬとすれば、何をなさいますか」と問われたとき、「アズ　ユージュアル。いつものように」と答えたそうです。明日死なねばならないとしても、いつものように馬背に股がり、説教をしに出掛けていくと言うのです。

私たちも、目を見張るようなことが起こっていなくても、伝道の業を、いつものように、いつものことを忠実に果たさせていただいているとき、「すべて時にかなって美しい」とソロモンが言ったように、神はなさってくださると思うのです。「失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります」とのパウロのことばを思い出します。

私たちのために人となってくださったイエス、身代わりの死を遂げ復活されたキリストを伝えることを、いつものようにいつものことを、しっかりさせていただこうではありませんか。

クリスマス、おめでとうございます。

日本ニューメディア宣教会

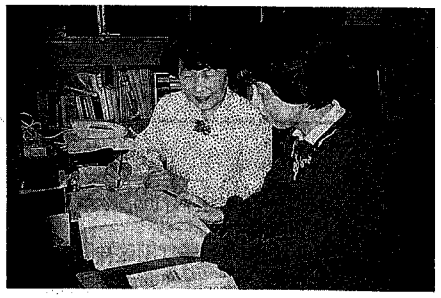
〈事務所〉〒169 東京都新宿区百人町1―17―8 淀橋教会内
☎03―3368―9165
FAX03―3368―9298

メディアの高度化、多様化に対応した伝道戦略の進展・深化の要請に応じて、ニューメディア時代の福音宣教の一翼を担うことを目的に設立されました。淀橋教会では、日本中の誰でも、またどこからでも、悩み苦しみ、悲しんでいる時、キリストの愛と慰めに満ちた福音を聴くことができるようにと、二つのメディアを通じてのメッセージ提供をしてきました。

その一つ、電話を用いた「愛と幸福のダイヤル」バイブルテレホンで、すでに一九七八年から開始され、心寄せる多くの人々の慰めとなってきました。これは毎週原則として日曜日の午後十一時頃から新しいメッセージに切り替わり、毎日二十四時間いつでも、どこでも、誰でも、そして何回でも聴くことができます。〔☎03―3368―5524〕

もう一つは一九八六年四月、ラジオ放送局FEBC（中波全国放送）を通じて毎週木曜日夜、「淀橋教会のおかえりなさい！」という番組を放送しています。これは、まだ教会に行ったことのない人々に、教会とはどんなところかを知ってもらい、教会を非常に親しみのある身近な場として受けとめ、最高の教会に足を運んでもらうことが主なるねらいです。また教会からはなれている人々が、この番組を聴いて再び教会に戻ってこられるような「愛のたねまき」の番組です。

レスポンスのあった方々のために、宣教会のために、一月に一回位スタッフで祈り会を持っています。（写真＝レスポンスの事務）



訪問伝道全国連合会

〈事務所〉〒160 東京都新宿区歌舞伎町2―19―11 新宿西教会内
☎03―3200―5559
FAX03―3207―6866

凡ての教会に一般常時伝道として「心の友として教会形成をめざす、組織的訪問伝道」が実施されるように。これが当連合の目的です。伝道は凡て最後は一対一で一人の魂を訪ね、友となり、祈り、ついに受洗にまで導くことが必須のわざです。このわざを担って奉仕するのがこの伝道活動です。

(1)牧師のパートナーとしての訪伝者。また訪伝者相互のティームワーク

伝道は、牧師だけのわざではなくまた信徒のみの個人プレーでもありません。牧師と信徒の協力のわざです。故に一人の求道者を救いに導くために、訪伝者がお互いに課題と労苦をわかちあって祈り合い聖書を共に学ぶティームワークの働きをします。訪伝者の働きは報告カードにより牧師との連絡や指導助言を受けつつ進めます。（写真＝第41回訪問伝道全国大会）

(2)「心の友」としての責任担当

求道者を牧師（訪伝委員長）から委託された訪伝者は、訪問、通信、電話等により週一回必ず心の友として魂との触れ合いを求め、忍耐と熱心と愛をもって聖日礼拝等に出席を勧め、イエス・キリストを救い主として受入れ、信仰の告白・受洗にまで責任をもって導きます。

(3)訪伝奉仕者が育成されるために

実り豊かな結果を期待するためには、訪伝者自身が常時そのための教育訓練をうけねばなりません。訪伝者はそのためにティームワークの集いをもち、共に祈り、み言葉に養われよりふさわしい訪伝者となります。

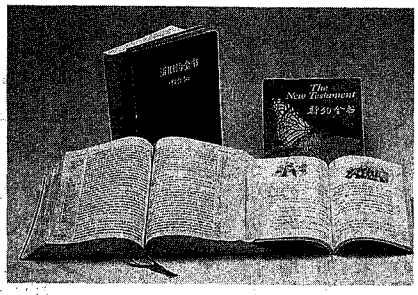
新生運動

〈本部・工場〉〒352 埼玉県新座市石神1―9―34 ☎0424―74―2212
〈出版部〉〒101 東京都千代田区神田駿河台2―10CCビル7F ☎03―3294―7185

「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」の成就を願いつつ、文書伝道の働きをとおして、教会に奉仕することを目的としている。特に、日本を始めとしたアジア諸国、CIS、東欧諸国の福音化に重荷を持っている。

一九五四年、アメリカ人宣教師フレッド・D・ジャービス博士により始められ、一九六〇年よりアルフィン・アンドース師のもとで、印刷と文書伝道を主要業務とするようになり、主の祝福によりアジア最大のキリスト教専門印刷所を有するに至った。

一九八六年、ロアルド・リーダル師のもとでニュープロジェクト計画を推進し、コンピューター制御の大型印刷機を導入。現在、世界五十ケ国以上の国々に、聖書を始めさまざまな福音文書を送り出している。



働きとビジョン

(1)企画・出版

自社企画でトラクト、伝道用書籍、月刊誌などを出版している。

(2)世界宣教

さまざまな言語の聖書や小冊子を大量に印刷し、送り出している。特に、中国語・ロシア語聖書印刷には、力を注いでいる。（写真）

(3)教会や個人のための印刷業務

チラシ、ポスター、書籍などのデザインから印刷・製本までの一貫した業務も行っている。

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ

〈本部〉〒410-11 静岡県裾野市千福が丘21―85 ハーベスト・センター内
☎0559―93―8880
FAX0559―93―8883

創立者の中川健一師は、一九八〇年四月よりテレビ伝道に参加し、一九八六年一月に日本におけるテレビ伝道の確立を願って「ハーベスト・タイム」を設立。一九九〇年八月より、本部を静岡県裾野市に移転し、「ハーベスト・タイム・ミニストリーズ」と称する総合伝道団体の確立を目指す。一九八六年四月、伝道番組「ハーベスト・タイム」は全国六局での放映を開始し、一九九四年十二月現在、全国十四で放映されている。また、テレビ伝道、海外宣教、セミナー、クルセードの四本柱をもちながら活動している。

ハーベスト・タイム・ミニストリーズは、福音的超教派のテレビ伝道団体であり、ハーベスト・タイムというテレビ番組（写真）を通し、また、さまざまな方法を通して、イエス・キリストの愛の恵みを伝えたいと願っている。この働きはコ・ワーカー（同労者）と呼ばれる方々、および諸教会の献金により支えられ、継続されている。

創立以来の活動の基本理念は、以下の三項目である。

一、大宣教命令こそ、神が教会に与えた第一義的使命である。

二、ハーベスト・タイム・ミニストリーズは、この終わりの時代に、神により特別な使命をもって立てられた総合伝道団体である。

三、ハーベスト・タイム・ミニストリーズは、聖霊に導かれ、地域教会に仕え共に働くことを通して、大宣教命令を成就することをその活動の目的とする。

地域教会と超教派伝道団体 ④

キリスト者学生会総主事　片岡　伸光

地域教会と伝道団体

伝道の働きが広がるに連れて働きが多様化し、超教派伝道団体の数も増加していきます。私たち伝道団体連絡協議会に加盟している団体だけでも五十あまりあります。米国では、二万以上あるともいわれています。国の広がりや文化の違いもあることでしょうが、同じ主に仕える働きでありながら、地域教会も伝道団体も互いに知り合うことは難しく、従って無関心になることは避けがたいでしょう。日本はそこまでいきませんが、団体数が多すぎると、地域教会がその一つ一つに踏み込んで関わることは難しくなります。

私が関西で奉仕をしていた頃、私の属していた教会には、もう一つ別な大学生伝道をする団体のスタッフや学生も出席していました。そして、その教会の近くのいくつかの大学では、両方の団体の活動がなされていました。ときどき私たちのことを考えて親切に言ってくれるのだと思いますが、「どうして同じ大学生伝道なのに一つの団体として活動しないのですか」と言われたりすることもあります。しかし、両方の活動とも大学全体の規模に比べて小さく、当時学内で衝突するといったことは全然ありませんでした。むしろ、互いはアプローチも異なっており、それぞれは特徴を明らかにした奉仕をすることにより、大学内でさらに広範な幅のある働きができるという感触を互いにもっていたと思います。

地域によっては団体同志が争っているとの印象を与えたこともありましたが、今は専従者レベルでの交流や情報交換をしたり、学内で学生が合同の祈禱会や講演会をもったりするようになりました。

ところで、働きの使命や特徴が外部の人々に明瞭にされているということは、これからの日本の宣教を考えるときに、非常に重要であると思います。広大な宣教の畑をみるならば、まだまだ伝道団体の数は少ないくらいです。しかし、伝道団体が何を目的として、どのような活動をしているのかということが、地域教会によく理解されなければならないと思います。それは、協力し共に働くための大切な一歩だからです。

私が、そのころ葛藤を覚えたのは、伝道の現場である大学内よりは、むしろ自分の属する教会内においてでした。教会は私たちが従事していた学生伝道の働きを大切なものとして認めてくれていました。それが私個人にとってどのような意味深いものであるかも理解されていると感じていました。そのことによる精神的支援は絶大でした。しかし、経済的な支援となると、地域教会にはその規模から来る限界もあり、ことに献金による支援を得ることは難しいことでした。ある教会では、あまりにも多くの献金依頼がくるので、平等に対応するために、どこにも献金しないことにするという決議をしたとも聞きました。別な牧師は、等距離に関係をもつことにしたと、教会員が同種異団体で働く場合の対処法を話してくれたことがあります。

また、ほんの小さな意見の違いであっても、競争しているような印象を与えないために、学生伝道に関することは自分の教会内の交わりでは話題として出しにくかったことを覚えています。その他様々な事情から、自分の属する超教派伝道団体の働きについて、自分の教会の中で話題にしにくいということは少なからずあるのではないかと思います。とくに私は、献金による支援を訴えることを、他の教会ではよくしましたが、かえって自分の教会ではためらいがどこかにありました。

地域教会が目を向けることのできる範囲は、制限もあることでしょう。そのような中で、地域教会が必然的に伝道団体を選別した上で関わりをもつことは避けられないことでしょう。キリストの体全体から超教派伝道団体の使命と存続意義を見直すために、とるべきところなお多しです。

つづく

発行日　一九九四年十二月二十日
発行者　羽鳥　明
編集者　鈴木　繁